

久松潜一著

和歌史第四卷

近世和歌史

東京堂出版

著者略歴

愛知県・明治27年12月生・
東大卒・東大名誉教授・文
学博士・学士院会員

主な著書

日本文学評論史全5巻・和
歌史全5巻・国文学通論・
万葉研究史・日本文学史全
2巻・日本文学研究史・そ
の他

© 1968

和歌史 第4巻

¥ 1500

昭和43年4月20日

初版印刷

昭和43年4月30日

初版発行

著者

ひさ まつ せん いち
久 松 潜 一

発行者

東京都千代田区神田錦町3の5

岩出貞夫

印刷者

東京都新宿区改代町24

田中昭三

発行所

株式会社

東京堂出版

東京都千代田区神田錦町3の5

電話 東京 291 局 8226 振替口座 東京 270 番

印刷 理想社印刷株式会社

製本 渡辺製本株式会社

序

和歌史の第三巻として中世和歌史を世に送つてから、ひきつゞき近世和歌史をまとめる心ぐみであつたが、それを果たさない中に数年が過ぎてしまつた。近世和歌史は佐佐木、福井博士らの著をはじめ諸家によつてまとめられて居るので、いくらかでも新しい見方や組織を与へないと書く意義が少いやうに思はれ、容易に筆をとることが出来なかつた。かつて木俣修氏と近代短歌を書いた時、近世をうけもつて私なりの近世短歌史の素描を行つたのも、高木市之助氏とともに古典文学大系本の近世和歌集をうけもつて近世和歌の一端にふれて見たのも近世和歌史を書くための下ごしらへとしたい心持があつたのである。

近く近世和歌や近世歌人を新しく見直さうとする機運も動いてゐるやうに見うけられ、田安宗武や加納諸平や良寛、曙覧の研究なども種々まとめられてゐる。私の近世和歌史はまとまらない中に時は徒らに過ぎてゆくので、これまで近世和歌や歌人について書いたものを主とし、二三の歌人について新たに書き、一応の序列を整へて本書をなすに至つた。

私は近世和歌は歴史的には真淵を主とする県居派と景樹を主とする桂園派とを二の焦点として構成されてゐると考へてゐる。その前に幽斎、長嘯子について茂睡、契沖、春満等によつて近世和歌が成立し真淵、景樹の

後には良寛、曙覧、言道、元義等の地方の歌人によつて新しい展開がなされ、近代につらなつてゐる。このやうな観点から近世和歌史の展望を試みたのである。近世歌人を網羅するよりは代表的な歌人を詳しく扱ひ、和歌のみでなく、歌論を扱ひ進んではその人間や学問との関聯を見ようとした。近世の歌論は中世歌論の非合理性と異なつて合理的であり、その和歌も古典和歌を基準とし、それを規範に仰いで詠作されてゐる。さういふ古典和歌への依拠から脱却し得たのは後期の地方歌人になつてからである。今日では近世和歌の主流の魅力が、地方歌人であつた良寛、曙覧らに及ばない観のあるのはそのためであらう。しかし近世和歌も新しく見直されるべきことが少くない。本書をまとめて見て書き足りないことの多いのを感じるのであるが、これは残る一巻の近代篇に於て補ふことにしたい。

昭和四十三年三月

久松 潜 一

和歌史第四卷 目次

近世和歌史

序説 近世和歌の意義と時期区分	セ
第一章 萌芽時代の和歌	二
一 この期の概観	二
二 細川幽斎と木下長嘯子	三
第二章 成立時代の和歌	三
一 この期の概観	三
二 戸田茂睡の歌論と和歌	三
三 契沖の人間と和歌	三
四 荷田春満の和歌	三
五 荷田在満と蒼生子	六
第三章 完成時代の和歌	六

一 この期の概観	六
----------	---

二 真淵と景樹	六
---------	---

三 真淵の生活と学問、歌文	六〇
---------------	----

—— 田安宗武及び県居派歌人 ——

四 小沢蘆庵と六帖詠草	一〇七
-------------	-----

—— 上田秋成その他 ——

五 香川景樹の生活態度と歌論、和歌	一一六
-------------------	-----

六 宣長の歌論と和歌	一二六
------------	-----

第四章 進展時代の和歌	一四〇
-------------	-----

一 この期の概観	一四〇
----------	-----

二 柱園派の歌人	一五五
----------	-----

—— 熊谷直好と木下幸文 ——

三 本居派の歌人	一五九
----------	-----

—— 加納諸平その他 ——

四 良寛の人と歌	一六五
----------	-----

五 橘曙覧の人と和歌	一七六
------------	-----

六	大隈言道の人と歌	一六三
七	幕末歌人について	一六九
	——平賀元義その他——	
八	女流歌人の歌	一七五
	——蓮月尼と野村望東尼——	
九	歎涕和歌集と志士の歌	一七九
	結び 近世より近代へ	二〇三
	和歌史研究書略解 四	二〇五
索引		二〇九

近世和歌史

序説 近世和歌の意義と時期区分

一

中世和歌につゞく近世の和歌を扱つて見たいのであるが、近世和歌は万葉集や古今集を生んだ古代、新古今集や玉葉集、風雅集を有する中世に比して、必ずしも和歌の上で隆盛の時代ではなかつた。それは近世和歌が万葉集復版といふ機運によりすぎて古典的でありすぎた点、さうしてそのために万葉集尊重に対して古今集を宗とする流れ、新古今集を中心におく流れが生じ、それ等が対立して各流派をなし相互に争ひあつたことが、一層古典によりすぎて現実生活からの創造性が稀薄になつたことも近世和歌の短所になつてゐると言へる。

もとより古代復版と言つても古代の精神、いはば原初の人間精神の上にたつて新しく現実を見直し、そこから今の和歌を創造することに外ならないが、近世和歌はそのやうな点が意識的に行はれたために、作品よりも理論の方が先きにたち和歌よりも歌論の方により重点がおかれたかに見えた。それが近世和歌を作品を主として見る時感じられる短所でもあるが、またそれが近世和歌の特質をもなしてゐる。いはば理論が先きにたつて作られた和歌作品といふ傾向がある。万葉派歌人、新古今派歌人、古今派歌人との三に近世歌人を大別するのが一般の傾向になつてゐるが、それはさういふ意味で近世和歌には万葉集や新古今集や古今集をあまり意識の中にもちすぎてゐることにもなるのである。さういふ欠点からのがれ得たのは幕末の地方歌人であつた良寛や平賀元義や橘曙覧や大隈言道らの少数の歌人に過ぎない。そのために是等の歌人が現在では近世歌人の上で最も魅力があり、当時としては歌壇を

指導し代表してゐた賀茂真淵や香川景樹もその一般的魅力に於て及ばないものがある。

これは近世和歌としては正統的な見方ではないとも言へるが、一般の魅力がそのやうになつてゐる点に、近世和歌は批判意識が創作意識に先行してゐることを指摘し得るのである。こゝで近世和歌を展望するに当つてもかういふ点を一面に考慮しつゝ作家作品をとりあげてゆくことにする。しかし近世和歌史の全体的展望を失はないやうにするために、近世和歌の史的区分を行つてその時代を概観するとともに一方に魅力を感じる歌人、また史的に重要な位置を占める歌人をとりあげてゆくことにしたい。

その前に和歌と短歌との名称について一言しておきたい。和歌といふのは和ふる歌といふ意味もあるが、一方に倭歌といふ文字も用ゐられてゐるやうに、日本の歌といふ意に多く用ゐられてゐる。従つて和歌といふ範圍には短歌が主になることは言ふまでもないが、万葉時代には長歌も旋頭歌も入つてゐるし、更に連歌も和歌の一昧とされてゐる。金葉集等に連歌が入つてゐるのもそれを示すものである。また俳諧も和歌の一体であるといふ事は西鶴の書いたものの中にも見えてゐる。かういふ点から言へば和歌は日本詩歌といふ意味にもなりさうである。しかしそれでは連歌史も俳諧史も和歌史の中に入つてしまふので、事実の上から困ることになるし、實際上では連歌も俳諧も和歌から略いて扱つてゐる。たゞ短歌確立以前の万葉集の長歌、旋頭歌等は和歌の中に加へておく方が適當であると思はれる。これは和歌の上から見ると妥協したやうで十分でないが、歴史的名称としてはそれともやむを得ないことである。さうして近世の和歌を見ると短歌が中心をなしてゐるが、真淵や鹿持雅澄など長歌をよんで居り、良寛にしても兎の歌をはじめ長歌をよんでゐる。従つて近世和歌の中にはこれ等を含むものと言へるので、近世和歌と近世短歌とではその含む範圍も異なつて来る。短歌が主であることはもとよりであるが、是等の長歌及び極めて

少数の旋頭歌をも含む意味から近世の和歌としておくことが適當である。近代に至つても多少の長歌や旋頭歌も存するのであり、海上胤平は長歌もよまなければ不具であると言つてゐる。しかし近代では新体詩が新しく長詩形として起つて来たから長歌等の存在意識は一層少いとも言へるのである。ともあれ近世では長歌、旋頭歌をも含む意味から近世和歌とすることにしたい。實質に於ては短歌が主となつてゐるのは中世に於てと同様である。

二

つぎに近世和歌を時期によつて分けると大体四期にわかつことが出来る。即ち第二期は安土桃山期の和歌である。この時期は中世に入れることも出来るが、織田信長や豊臣秀吉の精神が貫いて遠心的傾向が著しく近世的色調が強いのである。俳諧、浄瑠璃、歌舞伎等もこの時期に萌芽を見られるのであるから、近世文学の中に入れる方が適當である。和歌ではそれほどではなく、細川幽斎には保守的傾向も著しいが狂歌をよんでゐる点など近世的とも言へる。殊に木下長嘯子になると近世的な点が著しいのである。それにしても中世的なものも全体として存するのである。萌芽期と言つてよい。

第二期は江戸に幕府が出来てからの前期であつて慶長から元禄、享保の頃に至るまでである。和歌にも復古の傾向が見え、歌論の上では万葉集に復らうとする機運が現れてゐる。戸田茂睡、下河辺長流、契沖等はそれを代表してゐる。荷田春満も和歌ではこの期に入れることが出来る。まだこの時期は上方に文化の中心があり、上方文学の時代である。春満は主として江戸で活躍してゐるが本来京都の伏見稻荷神社の神官であり晩年も京都に歸つてゐる。近世和歌の成立時代と言つてよい。第三期は江戸時代中期であり安永天明の頃であり、文化が上方から江戸に遷ら

うとする文化東遷の時代とも言へる。賀茂真淵を中心として田安宗武や荷田在満はそれに先立ち、真淵門の村田春海や橘千蔭もこの時期に入りたい。京都では小沢蘆庵や上田秋成があり伊勢の本居宣長もこの時期に入れてもよい。近世和歌では展開期と言ふべきである。第四期は江戸時代後期であつて文化、文政から天保嘉永にまで至つてゐる。文化は江戸に中心がある。たゞ江戸の方ではそれほど注目すべき歌人は出ないで、京都に於ける香川景樹が歌壇を代表して桂園派を率いてゐる。その門に木下幸文、熊谷直好、八田知紀等が出てゐる。伊勢には宣長の系統にある加納諸平が注目される。さうしてこの時期は地方で自由に歌をよんだ歌人があり、当時では中央ではそれほど名も知られなかつたが、近代になつてその真価が知られて来た。越後の良寛、福井の橘曙覧、岡山の平賀元義、福岡の大隈言道等がある。言道は大坂へ出てこゝである年代を過してゐるが晩年には福岡へ皈つてこゝで没した。近世和歌の魅力の中心はこれ等の歌人にうつゝてゐると言つてもよい。女歌人にも京都の蓮月尼、福岡の野村望東尼等がある。年代的にわけるとこのやうに扱ふのが自然であるが、近世和歌を萌芽期、成立期、完成期、展開期とにわかつ時、完成期とは真淵と景樹とを二の柱として江戸と京都とでそれぞれ活躍し県居派と桂園派の二の流派が確立されたのをさしたい。さうすると年代的には第四期にまで入つて来るし、展開期は地方の歌人を主とする幕末の頃になる。

このやうに年代的には重複させた上で四期にわかつてはゞその全体の史的展開を跡つけることが出来る。こゝではそのやうな立場から四にわかつとともに、その間の有力歌人を扱ふことに中心をおきたい。

第一章 萌芽時代の和歌

一 この期の概観

過渡期といふのは織田信長が次第に勢力を得て安土に城を築いてから、やがて本能寺で明智光秀のために殺されるまでが安土期であり、秀吉が山崎合戦で光秀を討つて次第に勢力を得、群雄を統一して桃山や大坂に城を築き、関白となり、ついで歿するまでの時代である。元亀元年頃から、信長の殺された天正十年頃までが、安土期であり、それから慶長三年秀吉の死するまでが桃山期と言ひ得る。

この時期はこの二英雄によつて群雄が統御され漸く天下平定せんとしてまだ十分でなかつた。しかしその気魄は大きく、中世が求心的であるに対してこの時期から遠心的になつてゐる。基督教が移入され、宣教師が布教に従事して海外への窓が開かれるに至つた。その点では江戸時代に於ける鎖国の状態と異なつて広い視野のもとに行動する。切支丹文学、南蠻文化もこの時期の所産である。それは文学の意図は見られないにしても「サントスの御作業」や「捨世録」など表現に於ても文学作品となつてゐる。この時期は地域的には大坂が一の中心をなし、堺が商業都市として開けて来たのであり、利休その他の茶人も堺から出てゐる。隆達もこの地の産である。同じ茶道でも珠光等と異なつて利休にはこの時代の有する大きな気魄がみなぎつてゐる。かういふ点が文化の上にも現れてゐる。絵画に於ても桃山期の障屏画が隆盛であり、豪華な精神がみなぎつてゐる。文学に於ても山崎宗鑑や荒木田守武の俳諧はそれらの機運の中に近世的なものをうちたてゝゐる。浄瑠璃や歌舞伎も同様な精神のもとに現れて来たと言へ

る。和歌はそれらに比べると伝統的な傾向が多いが、それでも次第に近世的なものが築かれて来るのである。

二 細川幽斎と木下長嘯子

一

近世の第一期ともいふべき安土桃山期は近世和歌の上から言つて萌芽の時期であり、まだ近世的傾向は尠く中世の伝統をうけついでゐる点が多い。しかしその間に近世的なものを拾ひ出すことは出来る。それらを背景に有して種々の歌人が存する。これらは川田順氏の戦国時代和歌集によつて丹念に整理され、この時代の和歌に新しい照明が与へられてゐる。氏の戦国時代は応仁の乱から関原役に至る一百三十四年間をさしてゐるので、こゝにいふ安土桃山期より遙かに長いが、その間の歌人三百二十人の歌を挙げてゐる。その中には北条早雲、上杉謙信、織田信長、徳川家康もあり、殊に豊臣秀吉の歌は四十余首も挙げられてゐる。これらの歌人を和歌史的に整理し、もしくは位置づけてゆくことも意義があるが、歌人としてとりあげる場合に細川幽斎と木下長嘯子とを挙げることが出来る。どちらも武人であるが単なる武人ではなく、幽斎は古今伝授を伝へて居り、長嘯子は豊臣氏滅亡の後隠士として文芸の道に専念してゐる。而もこの二人によつてこの期に於ける伝統的なものと革新的なものをそれ／＼代表させることが出来る。こゝに二人をとりあげるのもその意味に於てである。

二